

京都陶磁器協会設立70周年記念

-未来に繋ぐ伝統の技と美- 京焼・清水焼の世界

会期:2024年3月8日(金)~14日(木)

会場:そごう横浜店8階=特設会場

主催:一般財団法人 京都陶磁器協会
後援:京都府 京都市 京都商工会議所
協力:京都陶磁器協同組合連合会

そごう横浜店では、1953年に京都における陶磁器文化の啓発・振興・育成を目的に設立された、(一財)京都陶磁器協会の設立70周年を記念して、3月8日(金)から「-未来に繋ぐ伝統の技と美-京焼・清水焼の世界」(展示販売会)を開催いたします。この展示販売会は、より多くの方々に京焼・清水焼の魅力を知っていただくことを目的に、同じく3月8日(金)から8階にて開催する、伝統と歴史に育まれた名匠、名店の美味と美技を一堂に会する「第38回 京都老舗の会」と併催にて開催いたします。

「京焼・清水焼の世界」は、現在京都で活動している陶芸家、名工から若手まで約130名(窯)が、オブジェから日用食器まで多種多様な感性豊かな作品約200点を出品します。首都圏では初の開催です。

古来からの伝統技法を守りながら、揺るぎなく革新し続ける、京都の伝統工芸の極みと芸術の融合をお楽しみいただければ幸いです。 ※本リリースの掲載作品は全て1点限りです。売切れの節はご容赦ください。

《出品内容》

オブジェ、花器、茶碗、茶道具、鉢、皿、急須、湯呑、ぐい呑み、マグカップ、アクセサリーほか。名工から新進気鋭の若手作家まで、感の美、用の美、約200点が揃います。

◆出品作家 約80名・約120点、 ◆窯元・工房 約50窯・約100点

《主な出品作家》

永楽而全、森野泰明、清水六兵衛、川上力三、吉村楽入、今井政之(故)、今井真正、高野昭阿弥、石田滋圭、宮川香雲、猪飼祐一、井上路久、谷口良孝、河井亮輝、平野泰三、小川与山、清水北斗、加藤泰一、ほか多数。

名工の作品 (一例)



永楽而全
《交趾フキノウ食籠》



清水六兵衛
《透容花器》



吉村楽入
《建仁寺小堀泰巖老師御書付
赤楽茶碗 銘 和氣》



清水北斗
《霞桜香炉》



今井真正
《幼き麒麟》

新進気鋭若手作家の作品 (一例)



林 侑子
《Bonbonnière grande》



河井亮輝
《灰釉線紋茶碗》



谷口良孝
《深海の遺跡》



高野昭阿弥
《色絵丸紋菓子鉢》



井上路久
《風雲青白磁茶碗》

《出品窯元・工房の一例》

六兵衛窯、晋六窯、陶楽窯、大日窯、陶庵、黒川正樹、高木岩華、重松康夫、中村譲司、八木美詠子など

お問い合わせ そごう横浜店 販売促進部 広報担当 花岡・時田 電話:045(465)5837(直通)

特別企画① 酒器百選

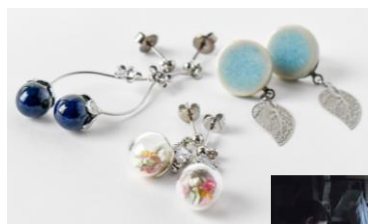
京都の陶芸家約50名が、それぞれの粋を凝らした酒器100点の魅力を伝えます。



※画像はイメージ

特別企画② 京・陶・飾 やきセサリーマルシェ

京都を拠点に活動するアクセサリー作家の「京焼×アクセサリー」を特集。



光本なお子 工房



瑞光窯



北澤美紀
: 紀澤(きのさわ)



特別企画③ お客様参加 陶芸教室

◆ 列品解説

開催日: 3月8日(金)・9日(土)・10日(日)

時間: 各日 午後1時～1時30分

※参加費無料、参加自由

内容: 出品作品の見所を京焼作家がご説明いたします。

◆ 参加お申込み・お問い合わせ 《受付》

そごう横浜店6階= 美術画廊

電話045(465)5506 (直通)

◆ 箸置き絵付体験

開催日: 3月9日(土)・10日(日)

時間: 各日 午前11時～午後0時30分 / 午後2時～3時30分

(各日とも上記時間内にて約30分程度)

定員: 各回先着24名さま

(満席時にお待ちいただく場合がございます)

参加費: 3,300円

※事前予約制・当日参加も可 (小学生以上)

内容: 箸置き2個に絵付(色付け)していただきます。京都へ持ち帰り、焼成して後日お渡しいたします。

◆ 楽茶碗削り教室 [講師| 吉村楽入]

開催日: 3月11日(月)・13日(水)

時間: 各日 午前11時～午後0時30分 / 午後3時～4時30分

開催日: 3月12日(火)

時間: 午前11時～午後0時30分 / 午後6時～7時30分

定員: 各回先着8名さま (定員になり次第受付終了)

参加費: 14,300円

※事前予約制

内容: 前もって成形された茶碗をヘラで高台などを削っていただきます。

京都へ持ち帰り、焼成して後日お渡しいたします。



※画像はイメージ

ご参考

京焼の歴史

『京焼』の特徴は種類やスタイルの豊富さにあります。

平安以降、公家や武家の屋敷、神社仏閣、有力商家の立ち並ぶ京の都では、新しい文化の発信地として、あらゆる分野で常に最先端の製品が求められていました。

ゆえに『京焼』は、安価な大量生産品ではなく、デザイン力を活かした少量生産の高級品でした。

明治期に入ると、京焼の窯元は、売り先を海外に求めるなど生き残りに奮闘します。

欧米のデザインや技術に追いつくために、絵画学校や陶磁器試験場を設立するなど、改革に取り組みました。

大正・昭和に入り、高級食器や茶道具だけではなく芸術の世界に広がります。

「前衛陶芸」や「オブジェ焼」と呼ばれる陶芸家による芸術運動の発祥地も京都でした。

また、同時期に日本の産業を支える電力の世界にも進出。電力供給に不可欠な碍子(がいし) やファインセラミックなどにも『京焼』の技術は用いられ、現代の私達の生活を影で支えています。

このように『京焼』は、京都という地の利を生かし、その時代の最先端・最高級の作品を今日まで送り出しています。